広工大生が砂原組を訪問

職場研究「貴重な経験になった」

現場見学のようす

本社で話を聞く学生たち

将来の進路選択に役立ててもらおうと、広島工業大学が1、2年生を対象に実施している「職場研究」を、砂原組（砂原傑社長）が受け入れて行った。建築工学科などに通う学生5人（男性1人、女性4人）が先月28日に同社を訪れ、建設業の魅力に触れた。職場研究は、学生が自ら将来について考えるキャリアプログラムの一環で、同社での受け入れは初めて。

この日、学生たちは最初に、同社が広島市西区で施工している13階建ての分譲マンション「アルファステイツ庚午中新築工事」（発注者＝穴吹興産）の現場を訪問。

現場では、作業所長の鍵原雅樹氏と工事担当の上惠木宏壮氏から工事概要や工程のほか、作業に際し特に「暑さ対策と安全確保に気を付けている」といった説明を受けたあと、実際に足場の階段を伝って施工途中の9階部分まで上り、躯体工事の様子を見学。その後、7階から建物に入り、下階に降りながら内装仕上げ工事の状況などを見て回った。

見学後の質疑応答では「どのような思いで仕事をしているのか」などと質問し、鍵原氏は「自分が携わった建物が完成し、みんなに喜んでもらえたときに、とてもやりがいを感じる」と回答。また、建築分野でのAI技術活用に関する問いには、上惠木氏が「AIは人手不足を補う生産性向上の手段として、実務に直結する〝頼れる相棒〟ともいえ、皆さんの時代にはもっとAI化が進むだろう」などと答えた。

引き続き、広島市中区平野町にある本社社屋に移動。ここでは、豊富な現場経験を持つ廣政亨建築部長が「建築の仕事は現場ごとに内容が異なるため、毎回新たな発見があり、ワクワクするような仕事。何十年と残る建物を通じ、たくさんの人とのつながりが生まれるのも魅力の一つだ。それにかかわる設計や積算など、いろんなポジションがあることも知り、将来のことを考えてもらいたい」と学生たちにエールを送った。

さらに、総務部の担当者が地場ゼネコンと大手ゼネコンの違いを説明し、同社では「豊かな街づくりに貢献する」を基本理念に掲げ、広島で「一番頼りにされる会社」を目指して、さまざまな取り組みを進めていることなどを伝えた。

最後に、入社7年目と2年目のOB2人と1年目のOG1人を交えて座談会が行われた。この中で「入社して大変だったこと」など普段はなかなか聞けないリアルなエピソードも披露され、学生たちは真剣な面持ちで耳を傾けていた。

参加した学生の一人は「初めて建築現場を見学し、建物が徐々に出来上がっていく様子や内部の配管の配置などを見ることができ、貴重な経験になった」と話した。